

健康寿命の延伸に歯科医療はどう貢献すべきか

—高齢者が日本一住みたい街をめざして—

日本大学歯学部歯科補綴学第 I 講座

飯沼 利光

日本は超高齢社会を迎え、2015 年の高齢者人口は 3,384 万人、総人口に占める割合は 26.7%と共に過去最高となり、80 歳以上人口も初めて 1,000 万人を超えたと報告されています。ただ残念なことに、ヒトの寿命は未だ自分ではコントロールすることはできません。しかし、毎日を健康で過ごすことは、工夫により多くの人々が獲得することが出来ます。現在、日本人の平均寿命は男性が 80.8 歳、女性が 87.0 歳で過去最高を更新しました。ところが、健康寿命は男性が 71.1 歳、女性が 75.6 歳と、介護や病気で自立して過ごせない期間が約 10 年間も存在します。そのため、超高齢世代を寝たきりにさせないことがこれからの医療には強く求められています。これまでの加齢研究から、要介護になる原因疾患としては、脳卒中や骨折が知られていますが、超高齢（85 歳以上）世代においてはその原因は必ずしも疾患ではなく、むしろ加齢による「低栄養・やせ」や「虚弱（フレイルティ）」に起因する部分が多いことが分かっています。このことから、口腔機能を維持し、豊かな食生活の実現により、QOL の向上を成し得ることは健康寿命の延伸にとっても重要です。

ところで、日本医師会のテレビコマーシャルで、西田敏行さんや坂東玉三郎さんが、肺炎が死亡原因の第 3 位になったとその怖さと、肺炎予防ワクチン接種を全国の高齢者に呼び掛けています。しかし、本来このような口腔が深くかかわる疾病予防の国民への啓蒙は、歯科医療従事者が中心となり行うべきではないでしょうか？さらに最近、高齢者の認知症による交通事故が数多く報道されています。そのため国は、超高齢世代に自動車免許書の自主返納を呼び掛けています。しかし、自動車が日常生活に深く溶け込んでいる現代社会では、その達成は不可能かも知れません。悪いのは自動車の運転ではなく、超高齢者が、加齢による運動能力や判断能力の低下を自覚、あるいは周囲が察知することなく、通常の世界を送っていることに原因があるのではないのでしょうか。

これまでこの判断は、医師に委ねられてきました。しかし、その一翼を歯科医師も担える可能性が明らかとなっています。

そこで今回のお話では、私たちの研究チームが行っている超高齢者を対象とした「お口と身体健康調査」から得た疫学データをもとに、健康寿命の延伸に役立つ口腔保健に関する最新情報と、これらが身体あるいは精神的な健康状態とどのような関連性を持つかに

ついて解説をさせていただきます。そして、超高齢社会において医師や介護者との医療連携において、歯科医療が果たすべき役割とその可能性についてお話をさせていただき、高齢者から、「武蔵野に住んで良かった」と思っただけで街づくりに役立てていただければと思います。

略歴：

昭和 62 年 日本大学歯学部 卒業（学部 35 回）
平成 3 年 日本大学大学院歯学研究科 修了（歯博）
平成 4 年 日本大学 助手 歯科補綴学第 I 講座
平成 14 年 日本大学 専任講師 歯科補綴学第 I 講座
平成 22 年 慶應義塾大学医学部老年内科 非常勤講師（現在に至る）
平成 27 年 日本大学海外派遣研究員として Newcastle Univ.（英国）に派遣
平成 29 年 日本大学 教授 歯科補綴学第 I 講座（現在に至る）
平成 29 年 日本大学歯学部附属歯科病院 副病院長（現在に至る）

資格：

日本補綴歯科学会 代議員 専門医 指導医
日本老年歯科医学会 認定医

受賞歴：

平成 24 年度（財）博慈会老人研究所優秀論文賞
第 20 回 国際老年学会（ソウル）Best Poster Award 受賞

著書：

老年薬学 口腔領域における治療と薬剤（編集および共著）
応用栄養学. スタンダード栄養・食物シリーズ（共著）
無歯顎補綴治療の基本（共著）